

前途晴朗なり

小倉 一純

降下する機体の窓から雪の原野を眺めていた。いくつかの小さな黒い点が、舞い上がる雪煙の中で絶えず動いている。

あれはなんだろう。目を凝らすと、それは人間だった。彼らは除雪機を使って、雪深い森に、道を切り開いている。「僕の前に道はない。僕の後ろに道はできる」受験生の僕は、高村光太郎の詩の一節を思い出していた。

羽田から、日本航空・ボーイング747に搭乗した。間もなく千歳空港である。気がつくくと、機内では着陸直前のアナウンスが始まっていた。

——ご搭乗の皆様、機長の〇〇です。ただいま千歳空港上空です。地上の天候は、大雪。通常ですとこのまま羽田空港へ引き返すところですが、本日はたくさんのお受験生が乗っていらっしやいます。これから当機は、管制塔の指示に従い、千歳空港に緊急着陸いたします——

「うおお」という低い声が沸き起こった。

受験生の大半が男子であった。やがて底の方からドスンというタイヤの音が響き、機体は地吹雪の滑走路に着陸した。機内には大勢の受験生が搭乗している——機長のそんな英断が功を奏したのではないだろうか。それは地上の晴れ間を突いた見事なタイミングだった。客席は拍手の渦に包まれた。僕は「北大合格」という夢を叶える^{かな}ため、生まれて初めての飛行機で、東京からやって来た。

——僕の場合であるが、高校を卒業してやむなく二浪している間に、受験制度が大きく変わってしまった。その目玉が、「共通一次試験」であった。現在の「大学入学共通テスト」の前身だ。

一九七九年、僕は新制度での初めての受験生となった。この試験は、それまでの国立大学一期校、二期校の区別をなくし、全国统一のマークシート方式で行われる。それにはシャープペンシルではなく、削った鉛筆が何本も必要になると聞いて、慌てた。そんな新

しい情報が入るたびに、不安が僕の胸を締めつけた。

ショックだったのは、希望校で行われる二次試験の前に、これまでになく科目数の多い試験が課せられたことであった。共通一次試験は、五教科七科目だった。僕は、「そんなの聞いてないよ」と不満を口にした。だが、幸運だったともいえる。二浪だった僕には、他の受験生とは違って、そんな多くの科目を勉強する時間的余裕もあった。

僕は、一週間も前から、札幌のビジネスホテルに泊り込んでいた。こぢんまりとしたホテルだが、清潔で快適だった。

冬将軍が北国を訪れる以前から、僕は札幌での受験を心配していた。季節特有の天候が交通機関にどんな影響を及ぼすのか、東京育ちの僕には想像もつかなかったからだ。受験の日程には最大限の余裕を持たせたかった。

この時期の札幌は受験生であふれていた。各ホテルは、遠方からの受験生を対象とした

セツト割引を用意していた。僕もそんなお得なプランを利用して、このホテルを予約した。札幌は、想像以上の寒さだった。ホテルの窓から見える景色は、雪に覆われ白一色である。風が吹くたびに、窓ガラスが凍りつくような音がした。

到着二日目、僕は風邪を引いてしまった。高熱で体がだるくて動けなくなった。はうようにして近くの薬局から風邪薬を買ってきて、ホテルのベッドで丸二日間横になり、身動きもしなかった。このときほど、どうしても眠らなければならぬと思ったことはなかった。熱を下げなければ、受験どころではなくなる。

寝込んだ翌朝、カーテンを閉めたままの部屋に、掃除のおばさんがやってきた。僕はベッドの中でぼんやりとその様子を見ていた。彼女は、部屋にひとつしかない小さな椅子に座って、冷蔵庫の上のポットでティーバックのお茶をいれた。それを一口飲んで、ほっとしたようにため息をつくとき、

「わたしの息子もちようどあんたと同じ年頃なんだわ」

と、僕に向かって声をかけてきた。彼女は、ふくよかな体にゆったりとしたグレーの作業服を着ていた。

「今、東京に行つてて、建築の勉強してるさ」

「へえー、そうなんですかつ」

ようやく半身を起こした僕は、彼女の言葉に答えた。

「あんたっ、北海道は初めてだべさ？」

「ええっ、はい」

「そりゃー、風邪も引ぐわな。養生してつたらすぐによくなるべさ」

「——だといいですけど……」

「じゃー、これなっ。よその部屋のお客の忘れ物だあ」

といって彼女は、時計台を見下ろす出窓に、真新しい男性週刊誌を置いていった。表紙には水着の女性が微笑んでいる。おばさんにひとことお礼をいうべきだったが、それも変だ

と思います、僕は黙っていた。

受験直前まで、東京の文化放送の「ラジオ講座」を僕は聴いていた。当時の都立大学の先生が、そのラジオ講座の講師だった。受験がもう目の前に迫っているというのに、この講師は、番組の最後には必ず「今からでも間に合います」といった。

僕は、その言葉にすぎるような思いで、受験の前日まで、ホテルのライティングデスクで勉強に集中した。持ち込んだ小型ラジオからは、番組のテーマ曲でブラームスの「大学祝典序曲」が流れていた。今、ふり返ってみれば、そうやって何かに必死になっていた時期が一番、思い出に残っている。

二月の北海道初体験は、正直言って、きつかった。鉛色の雲が垂れ込めた札幌の街は、「寒い」という言葉では足りなかった。地元ではそれを「しばれる」と表現する。僕の情熱は試練にさらされていた。

気がつけば、真冬の空からは雪がしんしん

と舞い降りていた。ホテルの窓から視線を落とすと、雪を背負ったタクシーが、白い水蒸気を吐き出している。青信号を合図にスパイクタイヤが空転を始めると、車はようやく発進する。日が落ちて固く締まったアイスバーンの路面が、バリバリと音を立てていた。待ったなしで北大の二次試験が迫っていた。

合格通知の発送は、同じ国立大学でも、学校によって日程は異なる。受験した北大からの合格通知を東京の自宅で待っていた僕は新聞に、「本当は合格の受験生、早まって自殺」の文字を見つけた。予定した日に合格通知が届かなかったので、不合格と思い込んだ受験生が悲観し、自らの命を絶ったのだ。合格者にのみ大学から通知が来ることになっていた。このことは、ほかの大手新聞の紙面でも大々的に報じられていた。

当時の僕は、旺文社の受験雑誌『蛍雪時代』の愛読者だった。あるとき、その雑誌に、北

大の特集記事が組まれていた。それを読んで、僕は、蛮カラな校風が特徴のこの大学に憧れを抱くようになった。それと、父が公務員で、学歴を重要視していた。終戦直後、父は、私立大学の専門部を卒業した。そして、役人となつてから母校に再入学し、大学を主席総代で卒業している。できれば旧帝国大学に入学して欲しいという希望を、そんな父から何度も聞かされていた。北大もその条件を満たしていた。

さて、僕の合格通知も予定日には届かなかった。郵便物は、雪の札幌から津軽海峡を渡って送られてくる。「一日ぐらい遅れるのは当たり前」と心の中でいい聞かせ、予定日の夜は過ぎていった。

翌日は、都内も雪模様だった。朝から待つて、あたりはもう暗かったが、台所の窓を開けるとすぐ目の前が門柱灯である。その白い灯りの中を大粒のボタン雪が乱舞していた。

午後七時を少し回ったころだった。バイク

の音が聞こえてきた。微妙であるが、間違いなくスーパーカブのエンジン音である。だが、郵便配達にしては遅すぎる時間だった。その音は徐々に大きくなり、我が家の前で止まった。窓からのぞくと、郵便局員の姿が目に入った。濃いブルーの厚手のカップを着込んだ局員が、真っ白な息を吐きながら、我が家の門扉に手をかけた。

「郵便です！」

素足にサンダルを引っかけ、僕は小走りで玄関を出た。外でははらはらと雪が降り続き、暗い空が月を遮っていた。僕はその郵便局員が差し出す封筒を恐る恐る受け取った。門柱の蛍光灯に照らされた薄茶色の封筒には、「北海道大学」の黒い文字が見て取れた。

「——ありがとうございますッ」

僕は必要以上に大きな声を出していた。

局員は濡れた肩で息をしながらバイクにまたがり、方向転換をして、もと来た方へ戻って行った。前日の受験生の悲報を受け、特別

の配慮で、合格通知を配達して回っていたの
だろう。当時、郵便局はまだ郵政省というお
役所であった。きつとあの郵便局員も必死
だったに違いない。――四十五年前、僕が大学
生となった、忘れもしない瞬間である。

考えてみると、千歳空港上空での、機長の
あのアナウンスは、客席の受験生に対する励
ましであった。そのお陰もあって、僕は憧れ
の北大に無事、合格できたのかもしれない。
郵便局員の後ろ姿を見送りながら、僕はあの
機長の力のこもった肉声を思い出していた。
その晩遅く、帰宅した父は、食卓に合格通
知を認めると、座っている僕の肩にそっと手
を置いた。父も喜んでくれているのだな、と
思った。

一か月後、僕は北海道へ渡る青函連絡船の
甲板にいた。まっすぐ前を見て、春の兆しの
まだ遠い冷たい空気を、僕は胸いっぱい吸
い込んだ。

津軽海峡波高し。なれど前途晴朗なり。